

L 5.43

3076

Nov. 1944

67/14

C





AMACHE SEICHO-NO-IYE

{ NOVEMBER 1944 }



THE HOLY SUTRA

Nectarean Shower of Holy Doctrines  
by Masaharu Taniguchi

R E A L I T Y

The angel continued: ---

Reality itself is everlasting,  
Reality shall not fall ill,  
Nor shall it get old, nor pass away;  
To realize this truth is nothing but to know the Way.  
Reality we call the Way, or Truth, as it permeates  
throughout the universe.  
The Way or Truth is always with God,  
And God is the Way or the Truth itself.  
Man who realizes Reality, and keeps it  
Can be above ruin and destruction, remaining forever  
constant and consummate.

For "Life" there is nothing but living on and on forever;  
and never shall he meet death:

"Life" is another name for Reality.

Reality has no beginning, nor ending, neither death  
nor destruction;

Therefore, "Life" also has no beginning, nor ending,  
neither death nor destruction.

"Life" is above the measure of time, and so, he is also  
above the measure of age.

Time, on the contrary, is indeed in the hands of "Life"  
itself,

An infinitesimal point turns into Infinite, or vice  
versa according as "Life" chooses it to be.

So it is no wonder,

He who believes himself young, should rejuvenate all at  
once,



Whilst he that imagines himself having grown old,  
should pass into senility all of a sudden.

Space is, also, no limitation whatever to "Life",  
Space is merely a "Category for Perception" that is  
a standpoint occupied by Mind himself; and Mind keeps  
the complete mastery over space.

Waves of ideas, when reflected upon space, become  
what is known as Matter.

Matter in itself is nought after all, and is helpless,  
without any properties of its own.

And yet, matter seems to have its own properties, and  
even to be capable of controlling Life:

But they are merely the "refractions" that have re-  
sulted, when the Inner-Life is perceived through the  
"Category of Perception".

Then, beware of such refractions, and try to keep free  
from them, and perceive the Inner-Life in its real  
aspects.

Those who realize the real aspects of the Inner-Man,  
can be above the bonds of karma relation, and demon-  
strate the Complete Freedom from all relations,  
that is intrinsic to Life itself.



消息欄 第十二回 順不同

編輯後記

唐 津 生

氏名	現在	住所	番号
板垣義雄	健在	8-23-B	HEART MT. WYO
三牧孝彦	全	8-18-B	HERT MUNT. WYO
古田大作	全	7-12-F	MCGEHEE ARKA
木村詢一	全	6-10-A	MCGEHEE ARKA
重中信次	全	49-12-A	RIVER ARIZO
團野留保	全	30-12-C	RIVER ARIZO
高田三郎	全	3-2-A	POSTON ARIZO
小林伯彦郎	全	10E-1-A	AMACHE COLO
清原孝作	全	222-10-D	POSTON ARIZO
小島潤男	全	227-14-C	POSTON ARIZO
堀隆太郎	全	124-12-2	MANZANA CALIF.
三宅桂吾	全	27-13-3	MANZANA CALIF.
上村みどり	全	2105-B	TULE LAKE CALIF.
尾辻夫人	全	4411-B	TULE LAKE CALIF.
野村肇吉	全	37-5-E	HUNT IDAHO
村上松代	全	38-4-E	HUNT IDAHO
谷口辨松	全	12H-11-F	AMACHE COLO
古本茂郎	全	1324.2TH	ST. DENVER COLO
石津ふじ	逝去	104-10-E	AMACHE COLO
中村冬郎	全	60-3-C	POSTON ARIZO

本月号にはキリスト教を生長の家の教へから  
 見眞理の把握に就いて谷口先生がやさしい文章  
 を以て誰れにも理解出来るやうに説かれてゐる  
 のを轉載させて頂戴しました。万教歸一を説く  
 生長の家は各宗教各宗派の眞髓を現代人に  
 早やく理解させ日常生活に活用せしめ「行」し  
 じて地上天國の顯現を計る實際運動である。  
 兼ねて予告の通り谷口先生第五十二回御誕生  
 を祝賀し併せて亜町生長の家創立二週年記念  
 として聖經「天使の言葉」を初刷千五百部刊行  
 致しました。暑からず爽からず十月の小春日和に打  
 集ひたる天の使達亜町誌友十数名三日に互つ  
 て各自光明遍照を唱へつゝの印刷頁折り線  
 本等に奉仕せられました。誌友各位の御礼  
 に届くのは近日です。尚希望の方々は冊三十仙  
 送料共で御分興致しおすかり至急御申し込  
 下さい。それから甚だ申し上げ悪い事です。時  
 下諸物質拂込材料騰貴のため止むを得ず素  
 る月号より「光明の音信」誌代実費一部金三十  
 宛に値上げ致しおす諸賢宜しく御了承下さい。

10H-7-E. AMACHE. COLO

編輯 唐書忠

10E-5-B. AMACHE. COLO.

執筆吉田米藏



振りには部内の人には勿論の事ブラツクの人達も驚異の眼を睜つて『生長の家へ入信すればあんなに成れるのかな』と語り合っています。以下畧す。ポストン第二キヤンプにて吉積平五郎報。

かゝる生々しき体験を聞く時吾等生長の家の誌友は人類光明化運動にもつと邁進せねばならぬ。吉積氏の云へる如く現今キヤンプ内は勿論所外に於ても在留同胞の一世は既に老境に入り昔時の流刺たる元氣なく未曾有の世界大戰下意氣は銷波し或者は心の現れとしてその肉体に念の集積なる病症をあらはしてゐる。高血壓に悩む人々に『人間必ず若返る』服部仁郎先生著の心讀を私はおすめする。各地生長の家誌友会には備へてあると思ふ。常住健康であり愉快に人生を過ごしたき人或は現在病に苦しむ人々の爲めに心の持ち方を左に表示し御参考に供します。

◎幸福と健康

◎不幸と病弱

平和の心	感謝の心	自在の心	怒る心	恐怖の心	不安焦燥の心
明るい心	愛する心	辨がむ心	審判の心	同情を求む心	不平不満の心
寛大の心	親切の心	愛する心	利己的の心	引掛かる心	羨み嫉妬の心
信ずる心	喜ぶ心	無我の心	悲しむ心	冷淡な心	暗い陰鬱な心
報恩の心	恵む心	勇む心	忘恩の心	慾深き心	奪ふ心

聖經「甘露の法雨」には「心」はすべての道り主又「心」に健康を思へば健康を生じ「心」に病を思へば病を生ず。とも教へられてゐます。



『生命の實相』をこれに御讀みなさいと貸與されたやうです。それ以來米田氏は

生長の家の人となられたのです。が何様三日にて現代医学難治の高血壓症

がケロリと治つた程の御仁！眞理の前には幼子の如なつたその素直さ、

『行』誌或は『生命の實相』に書かれてゐる眞理をそのまゝ素直に受け入

れた心の展開が念の映像たる肉体に反映しまして病無、不苦不惱の神の子

の本來相が顯現したのであります。『神我れと偕にあり。』生がされてゐる自

覺……神の無限の生命力に繋がつてゐる自分……我の自分が生きてゐるに

あらず、の悟りへ到達しますと其年の農作物にハツギリと効果が現はれま

した。野菜よし果物よし、と云ふ具合にて夫れ以來欲するものは自ら集ま

ると云ふ無限供給にも恵まれて居られるやうです。亦人間は働く程丈夫に

なると云ふ事を確く信じて實行せられ其の元氣の程は驚くばかりであります

ます。今ホストンのセクターに多くの高血壓症の方々を見うけます、さう

して此等の人々は惱溢血を恐れてたゞ恐怖の明け暮れに一樣に殆ど癡人の

様な生活をしてゐるのであります。又達者な人々でも働くのには同じく十

六時の月給だから少しでも時間の短い樂な丁裁のよい仕事をせねば損と云

ふ風に考へて自分の天與の生命力を退歩させてゐる人々が大多数ですが、

こうした環境の中に我が米田氏は高齡にも不抱ず世界に有名な暑熱地獄の

ホストンでしかも最もハードワークの農事部の水引き主任をされてゐま

す。人手不足の現今規定以上の時給超過で毎日毎活動され其の元氣と働き



2-3-3-A POSTON, ARIZO. 米田熊太郎

米田熊太郎氏は今年九月にて満七十才以前は加州ギルロイ市近くにて農業に従事して居られたる方でありました。今は老人と呼ぶにふさはしからぬ壯者を凌ぐ元氣に満ち満ちた御仁で御座ります。然し数年以前に農業に従事中に血圧亢進(二百以上)のため或日卒倒されました早速サシノゼ市或は桑港市の有名なる日白人医師に珍療を受けられたるも只絶対安静を守るやう申され如何様なす術なく見ろもの総て黄色にぼんやりと見え元朝の内は左程でもなかつたさうですが午後になると頭から何物かに壓へ付けられる感じがし何とも云ふに云はれぬ不快の念が日々續き全く生きた心地もなかつたさうです。或日神の導きとも申しませうが偶然の機會から生長の家にて発行の谷口雅春先生個人雑誌「行」を友人より恵まれました。わづか六十四頁の雑誌「行」その「行」誌を吸ひ込まれるやう夢中になつて二三日繰返し繰返し讀んで居られた。そして三日目にハツと目が覺めたやうに氣が付いた時には忽然と全快して居られた由であります。自分の病氣が快癒すると米田氏は早速友人であるギルロイ市の古賀夫人が以前より病氣であつたのを思ひ出し見舞に行かれ自分の高血壓症の解消した右の話をなされた上携帯の「行」誌を讀まれろ様差出されたのでした。所が古賀さんは以前より熱心なる生長の家の誌友となつて居られて今は澤山の本もあると却つて



十一月三十日 求むるに先だちて財寶集る日

結果を求めた愛は必ずしす不幸に終る。

よき果を結ぶのは結果を求めない愛ばかりである。

〔生命の實相〕

「求めよ、さらば與へられん」これは第一段階である。「神は求むるに先立ちて必需物を知りたまふ。」これは第二段階である。

更に進んでは「知り給ふ」も「與へ給ふ」も、そんな「求めるもの」を私事に豫想する心がなくなつてしまはなければならぬのである。

たゞ神のみがましますのである。神は大慈である。たゞ大慈のみがましますのである。今更何を求めよう。たゞ神の中へ溶け込むことのみにこそ求めなければならぬのである。溶け込むとは固まりがなくなることである。「我」の求めがなくなるとである。

偉くなり、富を得たい、光榮を得たい、すべての野心、野心がとけられない悲しみ。一切の怒り、不安、恐怖、呪詛、えりすべてのものを放下せよ。眞に神の神意でありますやうにと祈れ。

（おゝ！その中にこそ全でがあるものを。）

神を、聾振ひしてはならぬ。大声で嘔鳴らなければ聞えない者だと思つてはならない。註文して置かなければ、神はこの問題を忘れ忘れ給ふかも知れぬと思ふな。

①眞理を把む事は、無限大の換子を掴むとに等しい。

（智るの言は）



十一月二十九日 断然決意の日

32

決断とは何かを捨てること云ふ事である。倒れることを恐れず、自己の不決断のみを恐れよ。

（生命の實相）

眞に愛する仕事でないと大成することは出来ない。忠實にやる仕事

でないとは大成することは出来ない。忍耐強くあり、

凡ゆる難難に堪へ忍び、難難と闘ふことことをハイキングの如く樂の

しみ、しかも尚、その仕事を通して國家または人類に貢献せんと決意

したものでないと眞に大成することは出来ない。

才智ばかりで小細工する者はつひにその才智に翻弄されて自己が崩

れてしまふであらう。寛大な雅量と、鞏固なる意志と、而も人心を収

攬する沸る如き情熱とは大成するもの、ためには必要である。

更に大切なのは『神に導かれる』と云ふことである。信仰深くして、

神と偕なりとの自覺を以つてゐるばかりでなく、眞に神に導かれてゐ

る人にして、機に臨み爰に應じ自由自在の叡智を有つてゐる人でなけ

ればならない。

而もかくの如き人でも、人の信義を裏切ること極度に厭ふ人とな

ければ終を完うしない。

◎我とは肉の人間の肉の心である。右するも左するも肉の心悩みの根源

である。『我』を通さうとする者は自己を苦しめ他をも苦しめる。（智慧の言）

光の音信

亜町生長の家誌友會

発行



十月二十八日 良き種を蒔く日

31

けふ種を播いたからとて今日生えん。芽が出るには  
時間が必要なのだ。

(生命の實相)

若し吾々が實相なるもの、神、宇宙の本体、實在に對して、無限智、無限愛、無限生命、無限供給、無限調和……等々一切の善きものを具體的に認めることが出来ないならば、吾々は現實生活にもそれらの善きものが発現して来ないのは當然である。何故なら外界は内界の投影に過ぎないからである。吾等は我の念力によつて欲する事物を現象面へ創造するのではなくして、たい實相妙有の相を眺め、讃嘆し、禮拜し、感謝するのである。神思想を我の念力の凝念法だと思つてゐる人は全然間違であるが、何か欲する事件を招び出すためにする行事だと思つてゐる人も間違ひである。そしてこれを一種の觀念法だと思つてゐる人は全然當らずと云ふ譯でもないが一面觀である。神慈觀は、讃嘆行であり、禮拜行であり、感謝行である。

讃嘆と、禮拜と、感謝は、すでにその御業が既に成就してゐると云ふ前提のもとに行ぜられるものである。それには成就しないかも知れぬと云ふ不安が微塵もない。それは南無阿彌陀佛と稱へて、信心決定せると同じことである。たゞ異なるのは死後の世界に於ける救ひが信心決定せるところではなく、神慈觀に於ては『今』すべての救ひが信心決定せるところである。



十一月二十七日 神に融け入る神想觀をする日

30

健康とは筋肉の發達ではない。心に『私なき聖者は常に長命である。』  
神想觀の實修にあつて、自分の欲する事物を精神統一の世界から  
招び出して來るために、目的事物を凝念する人がある。そしてそれは效  
を奏さぬこともある。たゞ注意すべきは『私』の凝念の力によつて事物  
を現象界にあらはさうとするのは我の心の力の仕事であつて、神の力の  
展開ではないと云ふことである。それは時にはひどく疲勞を惹起せしめ  
又將來に愛憎の業を流轉せしめることがあるのである。何故なり『あれ  
が欲しい』と念することは一種の愛憎の念であるからである。  
神想觀の最高の方法は、愛憎の念を動かさず、たゞ實相の世界に、  
神の世界に、神の智慧と愛と生命との充ち満ちてあるその妙なる有様を  
觀ることである。吾々は我の凝念の力によつては、さう多くを動かし得  
ない。實相の創化作用の自働によつてのみ無限の力が湧いて來るのであ  
る。たゞ自分と云ふものを佛(神)の家に投げ入れて、(佛・神)の方か  
らはかられることが正しいのである。愛憎によつて人間が註文しな  
ければ、欲しい事物が與へられないやうに思ふのは神の力を信じないも  
のである。愛憎があればあるほど自由を失ひ、神の波長に合はず、  
神想觀の効果は少い。

◎一つの憎みは十人の憎みを招び一つの愛念は百人の愛念を招ぶ。(智恵の聲)



十月二十六日 家庭整ふ日

29

現在げんざいは過去かこの念ねんで決定けつぎした宿命しゆくめいである。未來みらいは………（生命の實相）

引き寄せて結むすべば柴しばの庵いばりなり解とくればもとの野原のほらなりけり

こんな佛教ぶつこうの諸行無常しよぎやうむじやうを歌うたつた歌うたが、妙有めううの世界せかいを殺風景さうふうけいな野原のほら的世界のほらてきせかい

の觀かんを興おこへしめた。現象界げんしやうかいの美うつくしき建物きやうぶつはあるけれども、それが解とけて

解体かいたいしてしまへば、その材料ざいれうとなつた殺風景さうふうけいな野原のほらばかりだと云ふのは、

實在じつざいの風光ふうかうを誤あやますること著いしいものである。金銀財寶きんぎんざいほう色々いろいろの形かたちにあらはれ

てゐるが、そんな金銀財寶きんぎんざいほうは空くうしきもので、いづれも電子でんしの組合くみあせ方に

よつて顯あられ方が異ちがふだけで、實相じつさうは一樣平等沙漠やうびやうとうさばくみたいな電子でんしに過すぎ

ないと云ふやうな人生觀じんせいかんである。これでは妙有めううの世界せかいは、たゞ材料ざいれうの世

界かいだと云ふことになつて了しまふ。『材料ざいれうはあれども製品せいひん（現象げんしやう）は假かりりの

態たい』と云ふやうな考かんへ方かたである。併ひし在來ざいらい、佛教ぶつこうではこの材料ざいれうなるもの

を、地水火風ちすいくわふうの四大だいだいとしたのであつて、四大だいだいを妙有めううとしたのではない。

地大ちだい（堅性けんせいのもの）と水大すいだい（濕性しつせいのものと）火大かだい（煙性えんせいのものと）と風大ふうだい

（動性どうせいのもの）とこの四つの要素ようそが組合くみあはされ、引きよせて結むすべば柴しばの

庵いばりのやうな現象げんしやうになつてゐるのであるが、分解ぶんかいすはたゞの要素ようそになる。

實在じつざい世界せかいもなければ、實在じつざい人間じんげんも無い——こんな考かんへ方かたでは佛教ぶつこうは生

きて來きない。妙有めううは理念實成りねんじつじやうの世界せかいなのである。

◎ありゆる言葉ことば、ありゆる行動かうどう、悉ことごとく未來みらいに果はを結むすぶ種子たねとなる。（智ちの言ことば）



十月二十五日 月一回の恩を返す日

28

毎朝が新生である。吾らは朝ごとに新しく生れかたはる。(生命の真相)

人空——曰く、物質の人間、肉体の人間は存在しないと否定せよ。

而して『妙有の人間』を今ありと肯定せよ。『妙有の人間』は抽象概念

の人間ではなく、現象肉体の人間よりも、尚は一層具体的であり、尚一

層金剛不壊であり、眞清淨眞無垢眞健康なるが故に、それを自覺す

るとき病氣が傾に癒えるのである。

(二) 法空——曰く、物質の世界、不完全形態を物質的にありはしてゐる

此の世界は空にして本来存在しないと否定せよ。而して『妙有の世界』

今此處にありと肯定せよ。『妙有の世界』とは現象世界よりも一層具体

的な金剛不壊の世界である。現象世界は具体的に見えてゐても崩れるが

『妙有の世界』は現象世界が破壊すると見ゆるときにも『わが淨土は安

穩なり』と釋迦が法華經に於て説いたところも金剛不壊の世界である。

金剛不壊と云つても祖元禪師が『電光影裡春風を斬る』と云つた如き、

風の如くエーテルの如きものであるが、斬つても斬れないと云ふやう

な頼りなき世界ではない。『寶樹華果多』として、衆生の遊樂すること

ろなり、諸天鼓を打ち伎樂を奏し、曼陀羅華を雨ふりして大象に散す

と法華經の自我獨にあるか如き具體的妙なる世界である。

◎常道これ道。常道を悔いなく歩む者はこれ達者。



十一月二十四日

本當に明るくなる日

27

本當の明るきは常に真理と、愛と、智慧とから来るのみである。(生命の真相)  
『物質なし、肉体なし、心もなし、たゞ妙有のみあり』此の『無し』と有る、とを明瞭に截断したところに生長の家の新しき佛教、新しき眞空妙有の説き方があり、それが驚くべき奇蹟をあらはし、キリストの云つたところの『われを信ぜずとも、わが業を信ぜよ』と云つた如き業蹟が續々あらはれるやうになつたのである。『眞空』とは現象が眞であり、眞無なのであつて、妙有が眞空なのでもなく、眞空が妙有なのでもない。現象が眞空であり、實在が妙有なのである。妙有とは捉へどころのないエーテルの如き、風の如き、煙の如き頼りなき存在の意ではない。妙有は妙なる具體的金剛不壞の存在である。『妙有の人間』は清淨無垢健康そのものの、具體的實在人間である。  
妙有の人間は肉体病むと見ゆる時にも、未だ嘗て病みしことなく、又これからも病むことなく眞人間である。それは五官に觸れ得ない故に非有非空などと古佛教では形容したのであらうが、後世人をして人間の眞実性を捕捉するにくろしませる結果となつたのである。『人間は佛性である、佛性こそ人間である』と云ふが如き表現法でも尚足りない。『眞の人間』は佛性と云ふやうな抽象的存在でもない、具體的な佛身であり、金剛不壞身である。



十月二十三日

神の子の自覺深まる日

26

人間そのもの、高昇は、宗教的自覺によつて生まれます。宗教的自覺とは、自然的存在としての世界と、五官に視える人間とをそのまゝアルとして肯定せずに、思惟又は直観によつて、一層理想的な世界とのつながりに於て、今よりも向上すべきものとして自覺することにあります。人間が今よりも向上すべきもののこの自覺は、換言すれば、「今のもの」が本物ではなく、それは假面であるから、その假面を幾重にも剝いて行けばついには本物が顯現するであらうことを自覺しての『現實の狀態』の否定であります。現實狀態の否定のない宗教は高等なる宗教ではなないと云はねばなりません。この現實否定は、最初の宗教に於ては斷食その他の苦行の形式や、財の放棄、人身御供、自己犠牲の狀態で起りました。人間は何等かの方或て現實を否定しなければ落着くことが出来ないのだとございます。戦争もその意味に於て『一層高次なもの』への憧憬を満足せしめるために行はれる現實否定だと思ふことが出来るのであります。人間は絶えず『自我』を否定しつゞけてゐなければ何等かの不安を伴ふものなのであります。人間本當に『自我』を放棄したときには人間は宗教的法悦を感ずるもののなのでございます。何故なら『自我』は本來無いものであります、『本來無いもの』の否定は、本當にあるもの（實相）の肯定となるからであります。



十一月二十二日 現象無しと完全を知る日

25

三界唯心の眞理に於て佛教、基督教、生長の家は一致す。(「生命の實相」)  
二千五百年前に説いたと傳へられてゐる佛教の説き方を標準にして、その通り説き方でないから間違つてゐると判断を下すのは間違ひである。  
佛教の次第に時處の展開に従つて完成するのであるから、生長の家の説く佛教が今迄の説方と相異なるからとして、外道だとか間違だとか云つてはならぬ。却つてその説かれる眞理の實生活に及ぼす力を見わばならぬ。  
樹の善悪は果實を見て知れである。一見高遠な眞理のやうであつても人間を本當によく救はぬやうな宗教は駄目だ。

一切皆空を生長の家のやうに物質もない、肉体もない、心もないと、綺麗に『なし』と截ち切り得ない人が在來の佛教界にあつて、『空とは畢竟無し』と云ふ意味ではない。空の意義にはもつと玄妙の意義が存するのである。物が全然無いのではなく、物あるが儘に是れ空であると観ずるのが眞空妙有の觀がある。これを非有非空、亦有亦空の理とも云ふ等と云われるのである。非有非空と云へば中々偉さうだが、『有るのではない、ないのでもない』と云ふことであり、『亦有亦空』とは『あるのでもない、亦無いのでもある』と云ふことである。』と云ふことである。  
一箇の牡丹餅を出されても非有非空では食へるわけにも行かぬから、一生涯考へて神經衰弱になるであらう。



十一月二十一日 人間觀を革命する日

24

すべてのものは貴方の周圍に於て調和してゐるのであります。すべては一つの神より生じて互ひに生かし合ひてありますから、あなたにとつて恐怖すべきものは一つもないのでございます。物質的『面』から觀れば如何様に觀える方も知れませんが、事物にはそれらの『面』があるのであつて、私はその物質的『面』から觀る人の見地を決して否定するものではございません。空間面から人間を觀れば人間は『オギア』と生れた或る一定の空間的容積を占めるところの各々別々の物質的塊でありますが、それを『生命』と云ふ内面から觀るならば人間は決して空間的容積の存在ではなく、『生命の内面的持續』であります。『生命』には空間的寸法がない。これは何寸の『生命』何尺の『生命』と云ふことはないのであります。その生命の内面的持續は決して時計の針の回轉數に比較して數へられる持續ではありません。さう云ふ現象的時間は、われくの生命の体験の世界では超越せられてしまつてゐるのであります。それは『一瞬』の中に『久遠の持續』を含んでをり、これを握れば一點となり、(一點と云ふと雖も、空間を指示する一點もなし、されはこれを『無』と云ふも可)とそれを開けば無窮となる『無即窮』の持續こそ人間なのであります。『無即窮』こそ吾々の『生命』の實相であり、これを稱して『純粹時間』又は『純粹持續』と云ふのであります。吾が生命は『無即無窮』なるが故に死なざるものであります。無即無窮を知つてこそ『無』の門を開く超えたのであります。



十月二十日

欲しいを捨てる日

23

自分を本當に愛する事の出来る者は、本當に隣人を愛する事が出来る。『善悪愛憎に捉はれると云ふことは、』斯うありたい。『斯うしたい。』『逢ひたい。』『見たい。』『食べたい』などの『たい』に囚はれることである。この『たい』が心にある間には、その人はどうしても『たい國』の囚人で、本當の自由も極樂もその人にはあり得ないのである。天理教では此の『たい』を『惜しい』『欲しい』などの八つに別けて、八つの埃と云つてゐる。『E』が心の病氣であり、心の病氣が肉体に投影して肉体の病氣となるのである。

時々私に病氣の相談を持ち掛けてくる人がある。そんな人に私が『あなたには心に不平ばかり持つてゐるから、さう云ふ不平を捨てなさい』と云ふことがある。すると益に相手は不平らしい顔附をして、『私は別に不平の心を有つてゐませぬ』と云ふ。『併しあなたは、もう少し斯うしたい、斯うして欲しいと思ふことがあるでせう』と云ひますと、『それはあります』と云はれる。その斯うして欲しい、斯うありたいが、あなたの氣が附かない不平であつて、それが心が善悪愛憎に囚はれてゐるので、生命力が自由を得ないで病氣に罹つてゐる、その『かうして欲しい。かうありたい』の欲しいと、たいを捨てれば不思議に病氣が治ることがあるものである。



十一月十九日 一切皆善と知る日

22

「斯くてユダヤ人の逾越の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給ふ。宮の内に牛、羊、鴿を賣るもの、兩替する者の坐するを見て、繩を鞭につくり、羊をも牛をもみな宮より逐ひ出し、兩替する者の金を散りし、その臺を倒し、鴿をうる者に言ひ給ふ「これらの物を此處より取り去れ、わが父の家を商賣の家とすな」これはヨハネ傳福音書第二章一三節一六節に記載されたるイエスの言行であります。イエス自身がこれによつて如何に神社を尊はれたカと判るのであります。神社の境内すら、それは神聖なものであるから、それを商賣主義、金融資本主義によつて潰すなど云はれたのであります。Xの商賣主義金融資本主義を打倒して、神聖な神の秩序に於て、全世界を眞理國に導かんが爲であつて單なる暴力だと思ふか如きは大変な考へ違ひなのでございます。イエスも亦、御自身、金融主義打倒のために「繩の鞭」を揮はれ、「兩替する者の金を散らし、その臺を倒された」のであります。これは一見暴力であります。それは神聖なる暴力であります。イエスを單なる暴力否定論者や、無抵抗主義者だと観るとは大変な見當違ひであります。神聖なる暴力とは、超越的世界に既にある神意が、恰度種子が芽が出て土をもたげて顔を出すやうに、覆へるものを内部から被ひ除ける働きであります。それは神聖なるものの羽搏きであるから聖なる世の戦と云ふのであります。



十一月十八日 愛憎を捨てる日

21

ひらいた掌<sup>てのひら</sup>だけが新しくものを握<sup>つか</sup>むことが出来る。(生<sup>なま</sup>命<sup>いのち</sup>の實<sup>じつ</sup>相<sup>さう</sup>)

澤庵<sup>さいあん</sup>禪師<sup>ぜんし</sup>が柳生<sup>やぎふ</sup>但馬守<sup>たにまのり</sup>と誠<sup>まこと</sup>合<sup>あ</sup>つたとき、澤庵<sup>さいあん</sup>禪師<sup>ぜんし</sup>に少<sup>せう</sup>しも隙<sup>すき</sup>がなか

つたが、禪師<sup>ぜんし</sup>が柳生<sup>やぎふ</sup>但馬守<sup>たにまのり</sup>に授<sup>さづ</sup>けられた「不動智神妙錄<sup>ふどうちしんめうろく</sup>」と云ふのか

ある。それには和解<sup>わかい</sup>が必勝<sup>ひつしょう</sup>の道<sup>みち</sup>であると云ふことが書いてあるのである

る。和解<sup>わかい</sup>と云ふのは愛憎<sup>あいぞう</sup>に囚<sup>とら</sup>はれない道<sup>みち</sup>であるから同時に必勝<sup>ひつしょう</sup>の道<sup>みち</sup>と

なるのである。「不動智神妙錄<sup>ふどうちしんめうろく</sup>」の一節<sup>いちせつ</sup>に

「物<sup>もの</sup>に心<sup>こころ</sup>が止<sup>とど</sup>まり候<sup>さう</sup>へば、いふくの分別<sup>ぶんべつ</sup>が胸<sup>むね</sup>に候間<sup>さうかん</sup> 胞<sup>はう</sup>のうちにいろく

に動<sup>うご</sup>き候<sup>さう</sup>。止<sup>とど</sup>まれば止<sup>とど</sup>まる心<sup>こころ</sup>は動<sup>うご</sup>きても、うごかめにて候<sup>さう</sup>。たとへば

十人<sup>じにん</sup>して一太刀<sup>いちたう</sup>づつ我<sup>われ</sup>へ太刀<sup>たう</sup>を入<sup>い</sup>るゝも、一太刀<sup>いちたう</sup>を受流<sup>うけなが</sup>して跡<sup>あと</sup>に心<sup>こころ</sup>を

止<sup>とど</sup>めず、跡<sup>あと</sup>を捨て跡<sup>あと</sup>を拾<sup>ひろ</sup>ひ候<sup>さう</sup>はば、十人<sup>じにん</sup>ながらへ働<sup>はたら</sup>きを缺<sup>か</sup>かめにて候<sup>さう</sup>。

十人<sup>じにん</sup>十度<sup>じゅうど</sup>、心<sup>こころ</sup>は働<sup>はたら</sup>けども、一人<sup>ひとり</sup>にも心<sup>こころ</sup>を止<sup>とど</sup>めずは、次第<sup>しだい</sup>に取合<sup>とあ</sup>ひて、

働<sup>はたら</sup>きは缺<sup>か</sup>け申<sup>まを</sup>す間敷<sup>まいく</sup>候<sup>さう</sup>。若<sup>も</sup>し又<sup>また</sup>、一人<sup>ひとり</sup>の前<sup>まへ</sup>に心<sup>こころ</sup>が止<sup>とど</sup>まり候<sup>さう</sup>はば、一人<sup>ひとり</sup>

の打<sup>うち</sup>つ太刀<sup>たう</sup>をば受流<sup>うけなが</sup>すべけれども 二人<sup>ふたり</sup>めの時は、手前<sup>てまへ</sup>の働<sup>はたら</sup>き抜<sup>ぬ</sup>け申<sup>まを</sup>

すべく候<sup>さう</sup>。牛手<sup>ぎゅて</sup>觀音<sup>くわんおん</sup>とて、手<sup>て</sup>か牛<sup>ぎゅ</sup>お入り候<sup>さう</sup>は、弓<sup>ゆみ</sup>を取<sup>と</sup>る手<sup>て</sup>に心<sup>こころ</sup>が止<sup>とど</sup>ま

らば、九百九十九<sup>いっぴやくいっしゅうきゅう</sup>の手<sup>て</sup>は皆<sup>みな</sup>、甲<sup>よろ</sup>に立ち間敷<sup>まいく</sup>候<sup>さう</sup>。……」

心<sup>こころ</sup>が一つの物<sup>もの</sup>に囚<sup>とら</sup>へられたなり牛手<sup>ぎゅて</sup>があつても他<sup>た</sup>の手<sup>て</sup>がお留<sup>る</sup>守<sup>し</sup>に

なつて自由自在<sup>じゆうじざい</sup>を失<sup>う</sup>ふ。

◎自分<sup>いづれ</sup>は自分<sup>いづれ</sup>の自在<sup>じざい</sup>である。自分<sup>いづれ</sup>は神<sup>かみ</sup>の子<sup>こ</sup>であるからである(智<sup>ち</sup>恵<sup>ゑ</sup>の言<sup>こと</sup>は)



十一月十七日 鶏卵禮讃を止める日

20

汝等何にを食ふ何を飲まんとと思ふ煩ふ勿れ。

〔生命の實相〕

鶏卵に砂糖が缺乏してゐて成るべくその消費を抑制せよとの國策である。これは國民体位向上の上から云つても至極結構なことである。日本人は鶏卵を食たからとして体力が増進するものではない。鶏卵の食用は殺生になりぬ唯一の榮養食であると信じて私が毎日鶏卵を食してゐた頃に私は始終下痢して、結核二期のやうな青褪めた顔色をしてゐたのが、鶏卵食の廃止によつて下痢の止つたことは私の「生ひ立ちの記」に出てゐる。鶏卵は柔いから病人の食用として消化が好いなどと思つてゐると全然その反對である。人間は「何を食ひ何を飲まんとと思ふ煩ふ勿れ」と云ふのが生長の家的主張であるから、鶏卵食を私は決して排斥するのではない。鶏卵食を攝らなければ、また何々食を攝らなければ病人や虚弱者に榮養が攝れないと思つて鶏卵の統制に悲觀してゐる入達に、鶏卵以外の普通の食物にもつと榮養の多いものがザラにあり、外見は硬くとも却つて消化に好いものが充分あると云ふことを指摘したのである。すべて柔かいものは消化し易いと云ふ考へは間違である。固いものとそ消化を促進するのである。鶏卵を食するなうば硬く茹た方が生卵よりもよく消化する。鳩は消化を促進するために、煉瓦片を榮養にとる。



十一月十六日 自在無礙の日

19

見えないものだけが本當の存在である

(生命の實相)

秋野孝道師は自分の先輩西有禪師が赤痢に罹つたとき、の心境と生活態度を時々話して感嘆せられたものであつた。『西有禪師が赤痢をやつた時に私は感心した事がある。看護婦が來て便器を以て尻の處へ當て居る。それに眼鏡を掛けて「元字脚」といふ本の下見をして居つた。目が凹んで了つて、日に何十回と下痢をするので聲なども噎れて居る。私は見舞に行つて見ると、巡査は向ふの縁側に腰を掛けて居る。私がこんな大患で貴僧本を見ては身体に障るでせう、と言ふと、「十二見方は見る方放る方は放る方でやろさ」と小さい聲で言つて居つた。ナカリ、そんな本など見て居れる時ではないが、其の時の老師の狂歌があつたけれども忘れて了つた。老師の境涯は實に病不病を離れて了つてゐるのであります。』

秋野孝道師は西有禪師の善いところへ目を附けた。それが悟と云ふものである。見る相手方が光つて見えたととき此方が光つてゐるのである。見る相手が曇つて見えたととき此方が曇つてゐるのである。若秋野孝道師が西有禪師を評して「西有禪師ともあらゆるものが赤痢にかゝるなんて何のさまだ」などと考へたとしたら秋野氏は地獄の鬼の心になつたであらうに。



十一月十五日 神聖受胎を自覺する日

15

釋迦は右脇より生れ、イエスは處女マリヤより生れ、而して神の右に坐すと云はれてをります。兎も角、普通肉欲を表現するところの陰部から生れなかつたところにその神話の注目すべきところがあるのでございます。ヨハネ傳福音書には「斯かる人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、たゞ神によりて生れしなり」と書かれてをります。肉欲の結晶に非ず、血液の凝結にあらずる「眞の人間」なるものに對する直觀——人類が肉體ならざる「眞の人間」を本能的に翹望せずにはゐられなかつたその人類的生命の要請こそ斯かる處女懷妊または、不染妊娠の神話を作成せしめたのでございます。眞にイエスの母マリヤが處女であつたか否かは問ふところとございませぬ。また釋迦は大量壽經によりますと、「兎卒天より神を下して摩耶夫人の右脇に入る」と書かれてをります。最高の天界よりの天降りであります。これは釋迦のみならず、凡ての人間は悉く、神界より天降りるものであることを暗示する神話であり、神話とはたゞのお伽譚と云ふやうなものではなく、人類の「眞の人間」に對する本能的要請の表現であります。ヨハネは云ふ「その名を信ぜしものには神の子となる權を與へられたり」と。名號聲字は即ち實相であります。「眞の人間」の實相、その實相への要請（かくあるべき筈で内的要求）を信ずる者は神の子となる權をあたへられてゐる、即ち「神の子」であると云ふことであります。



十一月十四日 静かに自己を省みる日

17

前進は時として後退によつて起るものでございます。老子は『枉れば則ち直し』と申しました。が尺蠖虫は柱ることによつて前進しますし、人との交渉は、先づ最初譲つて相手の悦びさうな一語を與へて置いて、相手の氣をよくして置いてから、こちらが欲するところを主張すれば、相手は容易にこちらの望むところを容て呉れるものだと言ふことであります。無暗に突つ張るばかりが打ち勝つ所以ではないのでございます。巨大な魚を釣り上げるのは、無理に頑張つて糸を引張るとではないのであります。無理に引張れば糸が切れます。魚が引けば糸を延ばし、魚が抵抗をやめたとき糸を手繰る、糸を延ばすときは魚に負けたかのやうに見えませうとも、それは魚に負けたのではないのであります。前進は後退によつて獲得する。ことがあると云ふのは、この事でござります。我を張れば互に傷く、野球のボールは手前へ引くやうに掌を後退せしめて受けければ、掌が痛むと云ふことはないのであります。

叩かれて黙つてゐる者は時として一大偉人であります。『汝の右の頬をも旋してこれをおたせよ。上衣を奪ふ者には下着をも與へよ。十里の公役を強むる者あらば二十里を行け。』これはたい後退の教でも無抵抗の教でもな

い。『我れ地に穩かを出たさん爲に來れるに非ず、劔を出たさんが爲に來れるなり。』其處に必勝劔が藏されてゐるのでございます。



十一月十三日 感恩報謝の日

16

あなたはこの頃、生活に悦びが感じられなくなつたと被仰いますが、それは「私」と云ふものが次第にまた頭を擡げて來たからでございせんが、「個我」と云ふものは本來無いのでございしますから、「個我」と云ふもの、悦びなどは本來無いのでございします。本來無い「個我」を養ひ育て、本來無い個我の悦びを味はうと思つていらつしやいましたのが貴方の迷でございしました。貴方は個我さへ伸ばしたり自由が得られて幸福だと思つて分裂相剋を進んで選ばれたのでした。貴方は伸びて行くやうに見えておますけれども、それは形の上で伸びて往つてゐるだけで魂の方では退歩してゐるのでございます。だから其の分裂相剋からは決して本當の「よろこび」は得られぬものではありません。日比野友子さんが九月中北海道の諸地方に招かれて巡講にいらつしやいました。日比野さんは「感謝」の生活を強調してお話しになりました。講演後の誌友會で、ある傍聴者が日比野さんに食つてかゝりました。「あなたは感謝の生活を強調なさいますが、感謝の生活つだけでは消極的だと思ひます。」「それではもつと積極的なものとは何ですか」「よろこびです」と其の傍聴者は昂然として云ひました。「それでは其のよろこびを得るのはどうして得るのですか。」「その人は回答しませんでした。日比野さんは被仰いました。「感謝したとき本當のよろこびが得られるのではありませんか。感謝のないよろこびは根のない浮草のやうなものです。」



# 十一月十二日 諸事貫通の日

15

神はすべてあり給ふ。神はすべての創造めしであるから無限供給であり給ふ。神は到處に満ちてゐたまふ。無限供給は到るところに満ちてゐたまふ。叩けよ、さらば開かれん」眼を開けよ、さらば見出さん」である。こゝに無限供給の本願があるのである。私は時間空間の世界を去つて、こゝに無限供給の本源を掘んだのである。神はすべてのものを造り給ひ、吾れに必要を知り給ふ。既に私がこれが必要であると思へば、それを用意して與へ給うてゐるのである。わが求むる……は既に實相の世界に於て創造られてゐるのである。既にそれは創造られて顯現れの世界にまで運び來られつゝあるのである。私は今よろこびに満たされ、感謝に満たされてゐる……有り難うございます。有り難うございます。——以上は私が或る日に光明思念したところの無限供給の神想觀なのでございます。九日十日、十一日、十二日の四日間を通じて、神の智慧と、愛と、生命と、供給とをしづかに思想する一例を擧げたのでございます。必ずしも此の通り思念しなればならぬ譯はございません。一回に「智慧の思念」ばかりして他の思念をなさつて悪いと云ふのではございません。たゞ心に出來るだけ光明遍照の光景を描いて、それを見詰め、讃嘆し感謝なさるつもりで、この智慧と、愛と、生命と、供給との神想觀をなさるが好いのでございます。尙詳しくは「人生は心で支配せよ」を御覽下さい。



十一月十一日 金剛不壞の實相を悟る日

14

神は生命であり給ふ。一切の處に神の生命は満ちてゐたまふ。この家は神の生命に完全に祝福されてゐるのである。この家のありゆるものは悉く神の生命に満たされて生き生きと輝いてゐるのである。我がうちにも、我妻のうちに、我が子のうちに、召使たちのうちに、本部の凡ての人のうちにも、普及會のすべての人のうちにも、各地の誌友たちのうちにも、神の生命は充ち満ちて生かしてゐ給ふのである。吾々生長の家の家族たちすべてのうちに神の生命は充ちてゐ給ふ。どこにも病氣はない。神は決して病氣を創造り給はないから病氣はないのである。すべての生長の家族は神の光明 燦然たる生命に満たされて健康である。

われ今、わが全身を觀するに我が全身神の生命に満たされてゐる。わが全身は神の生命に満たされて、光明 燦然と輝いて現れてゐる。全身の一つ一つの細胞とごとく神の國土であつて、神の生命いまして光明 燦然と輝いてゐるのである。全身のすべての細胞は互に生かし合つてゐるのである。すべての内臓、すべての器官 悉く相拌み合ひ相生かし合ひ、互にその處を得て争ふことはないのである。だから私は常に健康であり、凡ゆる點に於て調和してゐるのである——これは或る日の私の『神の生命』に就ての默然の言葉であります。



十月十日

幸福のみ集る日

13

神は愛であり給ふ。神は到る處に満ちたまふ。従つて神の愛は到る處に満ちてゐられるのである。玄關から奥座敷に到るまで、家の隅々までも神の愛で充滿してゐる。私は神の愛に抱かれ包まれ護られてゐる。神の愛は私のうちにも入つて來てゐるのである。愛は一切のものを救し、育て羽含むのである。神の愛は太陽が善人をも悪人にも一樣に照り輝くが如く、また雨が善人にも悪人にも潤すが如く、善人をも悪人をも咎め給ふことなく、凡ての人を愛し給ふのである。その神の愛が私の中にも宿つてゐるのであるから、私は善人をも悪人をも悉く愛し救すのである。否悪人は本來存在しないのである。私は今すべての人を救したのである。すべての人に好意を放送するのである。

彼の愛が今私を取巻いてゐる。私は今神の愛の雰圍氣に部厚く包まれてゐるのである。愛は癒す。愛は淨める。私は今宇宙淨めの最後の淨めに生れ給ふた。宇宙大神の淨化の愛に包まれてゐるのである。如何なる誤解から生じた呪ひの念波も、怒みの念波も、憎みの念波も、大神の淨化の愛に淨められて、たゞ私に達するのは愛の念波だけである。如何なる病氣の人から送られて來る病念も悉く淨められ、自分に達するときはたい生す愛のみとなつてゐるのである。これは或る日の私の「愛の思念」でございます。特に神経痛などの人に此の神想觀をお勧めします。



十一月九日 神恩無限に感謝する日

12

神はすべてのすべて。すべての所に神は在しますのである。此の家の入口から裏木戸に到るまでもすべての部屋々々、その部屋々々の隅々までもお庭の隅々までも神の坐しまさなところとてはないのである。神は智慧である。調和の智慧である。到るところに調和が充ち満ちてゐるのである。此の家の入口から裏木戸に到るまで。凡ての部屋々々、其室の隅々までも、神の智慧は在しまし、神の調和は満ちてゐるのである。私の召使のうちにも、犬の中にも、小鳥の中にも、神の智慧のましまさざるところは。神の調和の満ちてゐないところとてはなく充ち満ちてゐますのである。すべてのものに調和が満ちてゐる。神は智慧であるから、秩序整然と大調和しないところとてはないのである。家族全部は調和してゐる。家族全部は互に拜み合ひ、感謝し合ひ、悦びに満ちされてゐるのである。神の欲し給ふことを私は欲し、私の欲する事を妻は欲し、妻の欲することを子供たちは欲し、召使は吾々すべての欲することを悉く知つて、吾等が斯くありたいと思ふことが自然にスラスラ運ぶのである。

吾が家庭には如何なる不調和もあり得ない。何故に到る所に神の智慧が行き亘つてゐるからである。神のみ智慧に感謝いたします。

これは私の或る日に於ける、神の智慧と調和を念じた神想観でございます。◎すべての善きものは調和した状態より生れる。(智恵の言葉)



# 十一月八日 自己憐憫を驅逐する日

11

世人を憐憫してはならないと同時に、自己憐憫してはなりません。あなたは自己を弱者だと思つてはならないのです。自己を何時でも起ち上る力のある強者だとして観ねばなりません。若しあなたか他から憐憫を受くることを自分に許すならば、あなたは自分自身をして弱者たるところを許したのであり、従つてまた自分自身を不幸ならしむることを許したのであります。自分を憐れむ者、他から憐れまれたいと思ふ者は奴隷の心であつて、神の子の心ではありません。自己を憐れむ者、他から憐れまれたい者は、畢竟するに自己中心の人間、利己主義者に過ぎないのであります。「自己」が無かつたら、自己を憐れむ必要もなければ、自己を他から同情されたいとも思ふ筈もありません。そして利己主義的感情は、それが「利己」的であるが故に大生命からの生命の流入を完全に受ける事が出来ず。斯なる感情は自己破壊の結果を惹起するのでございます。自己憐憫の人々が不幸に陥り、人から憐れまれたい人がいつ迄も悲惨な境遇にあり勝たぬのはその爲でございます。

だから、どんなことがあつても夢さめ「これは困つた」と呟いてはなりません。老子が云つたやうに「枉れば即ち直し」であり、「陰極は必ず陽轉する」のでございます。足はかゝむので自由に歩行が出来るのでございます。どんな時にも呟かずにをらうではありませんか。



十一月七日 人に激勵の言葉を與へる日

10

同情は善いことでありますが憐憫はよくないことなのでございます。人が悲しみに陥つてゐる際に、その悲しみに同悲の念を起して一緒に泣いてやるのは美しい同情でございます。然し、この人は「憐れな人だ」と憐憫の情を起すのは善くないことです。同情と憐憫とはよく似たことですけれども非常に相異してゐるのでございます。同情は相手と同じ情に泣くのでございましてけれども、「この人は弱い人だ」と云ふ輕蔑は伴ひません。ところが憐憫は、「この人は憐れな人だ、迎も起ち上る力がないであらう」と云ふやうな相手を弱者と見るやうな輕蔑の感じが伴ひ易いものでございませう。憐憫は必ずしも同情を伴ひません。憐れなる乞食を見ても可哀想だとは思ひますが、乞食と同じ感情にまでは成れないのが普通でございます。すなはち同情と憐憫とはよく似た感情でございますが、紙一重のところまで全く相異してゐるのでございます。吾々は人から憐れまれる事を断じて拒絶する強さを持たねばなりません。艱難に陥つてゐると云ふことは憐れまるべきことではありません。吾々の魂がその時こそ高められ浄められてゐる時なのでございます。では艱難に陥つてゐる人を憐れむ理由が何處にあるでせう。吾々は彼等に「可哀想だ」と云ふ言葉を投げかけろより「君は起ち上る力がある」と強くその人の力を鼓舞する言葉をこそ投げかけろべきでございます。



## 十一月六日 天下の公器と成る日

19

時代が愈々三百六十度回轉して來ました。人間の慾望が整理せられなければならぬ時代であります。利己主義的体制の一切のものが清算せられて、人間が天下の公器となる時代が來たのであります。統制々々と云つて縛られる時代が來たのだと思つてはなりません。縛られる「自我」の抵抗を感じるのは、あなたにまだ「我」が残つてゐるからに過ぎません。あなたに、若し自我が無かつたら、颺々乎として縛らうにも縛ることが出來ない筈であります。智慧の言葉に「縛られても自由自在」の語がありますか、本當に自我が眞空になつて了つたら、あなたは如何に統制が烈しくなつても自我の抵抗を感じることは決して無いに相違ありません。自我を満足せしめて、自己を我利々々者にして置くのが貴方の生活の悦びでございませうか。それともあなた自身を「天下の公器」ならしめて置く方が、貴方に生甲斐が感じられるでせうか。云ふまでもなく「天下」の公器たることの方が生き甲斐があるではありませんか。私利私慾はお捨てにならんとす。これから凡ゆる産業の統制は愈々厳重になり、殆どすべての主要産業は準國營的にならうとしてゐます。國營は能率を低下するかも知れませんが、しかし今は能率の問題ではなくなつたのであります。時代が一大革新期に入つたのであります。時代の力に逆つては何事も成就しないのでありませう。

『ハイト中心歸』が要求される時代が來たのであります。



十一月五日 自己放棄の日

8

力を得る原則は、神を自己と最も近しきものとして感ずることであり  
ます。神を「親さま」と感じ、「み親」として感じ、今現にその慈手の  
上に抱かれてゐるのであると感ずることが必要であります。自分が神  
の子であり、神が自分を通して神の生命を顯現したまふのであること  
を常に自覺することが必要であります。自分を「神の生命やどる」と  
感ずることが必要でありますが、その同じ眞理を、感謝を忘れて、傲慢  
に「我れ神なり」と感じますと、「我」の自分を「神なり」と主張するこ  
とになりまして大変な間違を來すことがあります。

道元禪師も仰せられましたやうに、「自己を習ふ」とは「自己を忘る」と  
ことであります。自己を捨て、自己を忘れ、自己を全然否定し去つたと  
きに、本當の自己を學ぶことが出来るのであります。傲慢に「我れ神な  
り」と簡單に自覺するのが生長の家ではありません。「我」を否定し、  
否定し盡したる最後のギリ／＼に、最早「我れ生くるに非ず、大神の生  
命吾れにあつて生くるなり」の自覺に到達するのであります。

イエスの言つたところの「われみづからにては何事をも成し得ず」との  
自覺が「吾れはすべての事を成し得」との自覺の根柢になるのでありま  
す。謙遜と自尊との一致。謙遜のない自尊はたゞの傲慢に過ぎません。  
◎死んだと思つたり生きられぬのだ。形にとりはれなくなるからだ(智恵は)



十一月四日 一切萬物總感謝の日

7

吾々は先づ「神の子」であることを自覺し、「物質」のやうな不完全不自由なものが決して自分ではないことを自覺し、更に一切のものが如何にそれが普通の人には陣痛のやうな苦しみに見えようと——無痛であることを自覺するとき、吾らはどんな艱難をも苦しみでなく受容れることが出来るのであります。

今は時代は人類史であつて以來の一大変革期に遭遇してゐるのであります。謂はば新しき「史代」を生み出すべき陣痛期であります。色々生活に、經濟的その他の重壓は加はりませう。此際此時、それを無痛に迎へる方法は「人間」と云ふもの、自覺の一大轉換を必要とするのであります。人間を「物」より「靈」へと置換へることが必要なのであります。これこそ未曾有の「史代」を無痛で生み出すべき唯一の方法なのであります。

吾等は自己自身に對して一層多くを期待したならば一層多くの力が自身から生み出されて来るのであります。常に謙虚な心を失つてはならないのであります。若しその力を神から來たものであるとして感謝せず、自分の力であると誇負するやうな心がありまして、その力の本源から絶縁され、常なる力が出て來なくなつて来るのであります。力の源泉は「感謝」する心にあるのだと云ふことを知らねばなりません。



十一月三日

大聖の盛徳を感謝する日

6

何故吾々は人間自身を『物質』であると觀じ、肉体であると觀じたならばエデンの樂園から追放されねばならぬかと云ひますと、物質の屬性として第一に吾々が知つてゐるのは、自由自在性の缺乏であり第二はその有限性であります。人間を『物質』として觀、『肉体』として觀るのは、人間を不自由不自在なものと觀、『有限』なるものとして觀ることになるのであります。吾々は自己を『偉大なり』と認めれば認めるほど偉大性は發揮されるのであります。若し『有限』なるものも『不自由』なるものとして認めれば、自由暗示によつて自己の自由自在性を、自己の無限性をそれだけ抑へることになるので、その程度に於て吾々はエデンの樂園を追放せられねばならないのであります。

吾々は自分自身に期待するところ多々のものを其處から汲み出して來ることが出来るのであります。出産には目眩く程陣痛を伴ふと信じてゐる者には、眞に目眩くほどの陣痛を伴ふのであります。併し、生長の家の幾多の誌友は『お産は病氣でない』との信念を持ち『従つてお産には痛みを伴はない』との信念を持てゐますので、眞に無痛分娩を得る御婦人が非常に多いのであります。吾々は自己に『無痛』を期待すれば『無痛』が來ることを知らねばなりません。茲に精神上の新体制があるのであります。④生命よ、愈々實相の高貴にまで翔けあがれ。

(智恵の言は)



十一月二日 五官の惑はしを去る日

5

『本當ですか』とその誌友は強ど歡喜であふれそうな眼差で中島先生を見詰めました。『本當に智慧の樹の果を食べないでゐることが出来るのですか。そしてその吾々を瞞した蛇は、』

中島先生は『その蛇は今もゐるし、またゐないのです』とお答へになりました。『ゐる人にとつてはゐるし、ゐない人にとつてはゐない。』なか／＼その答は意味深長であります。其の誌友は不思議さうな眼光で、もう一度中島先生を見詰めました。

『蛇と云ふのは「土の塵」の上を這ふものです。』土の塵』とは「物質」のことです。物質をありとして取扱ふ「五官」の象徴が蛇であります。蛇の智慧に教へられて、智慧の樹の果を食べるとは、五官に教へられて、五官にアルと認める物質と肉体とをそのまゝ、アルと信じ、人間を肉体であるとして認めることです。斯く認めた以上は凡ゆる物質的制約がその人を束縛します。それが樂園追放なのです。』

此の樂園追放から人間の妬みの苦しみと産みの苦しみとが始まつたのだつた。『生命の實相』を讀んだ人に妬みの苦しみと産みの苦しみとが消えるのは樂園が奪還されるからです。樂園追放も樂園奪還も『今』あるのです。『今』を貴方は悟らねばなりません。

①ひとを拜め、自分を拜め、みんな神の子だ肉体のことではないぞ(智慧は)



十一月一日 人間智慧を捨つる日

4

中島興一先生が大阪へ講演に出張してゐられましたとき、一人の誌友が訪ねて来て、大変悲しい様子で斯う云ふことを申しました。「人類はアダムとイブとが智慧の樹の果をたべた原罪によつて、永遠に人生に於て苦しまなければならぬ」と云ふことは何と云ふ悲しいことでせう。人間が蛇の智慧にだまされて、智慧の樹の果を食べたと云ふことは實に恐ろしい事だと思ひます。何故、神様は蛇を創造つたりしたのでせう。今そんな蛇が此の世に出て来たとしたら私はその蛇を叩き殺してやります。併し、その出来事はもう何十萬年も前の出来事だと云ふのですから今はどうすることも出来ない。私はそれが悲しいのです。何十萬年も前に人間が蛇に瞞されて智慧の樹の果を食べた——そのために今も吾々人類が苦しまねばならぬと云ふのは……」その男の額からは脂汗が流れてゐる。

その男は本當に苦しんでゐるのでした。

中島先生は氣の毒さうに、その誌友を慈悲深い眼で眺めました。そして云ひました。「智慧の樹の果を人間が食べたと云ふのは歴史的に何十萬年も過去のことでありません。神話と云ふのは、超時間的世界の物語です。従つて今も、人間は智慧の樹の果を食べたり、食へなかつたりしてゐるのです。アダムの原罪も今あるのです。樂園追放も今あるのです。併し貴方が智慧の樹の果を食へないでゐることは出来るのです。」



『人間そのもの』であつて、その外に「人間」はない。人間とは常樂を云ひ、無病を云ひ、不苦を云ひ、不惱を云ひ、不壊を云ふ。肉体は「人間」ではない、人間の心の痕跡であり、足跡である。破壊すべきものは人間ではない。汝らよ、汝ら自身の不苦不惱不壊無病の實相を見よ。

（昭和七年十一月十日）

### 生死の敵

生死はまゝ、なりめと云へど生死は心のまゝである。兄弟を生かす心の者は生き、兄弟を殺す心の者は死す。殺すと云うても刀で斬ることではない。兄弟を生かす心のないものは殺してゐるのである。周囲の人々の思はくを生かしてやるのは「兄弟を生かす」の最も大なるものである。自己の好まざる所を他に轉嫁するは「兄弟を殺す」の最も大なるものである。周囲に痰を吐散らすな、紙屑を投げ捨てろな。これは物質のことでもあれど、物質のことだけではない。口角沫を飛ばして兄弟を非難する者は兄弟の心に唾を吐きかける者である。腹立ちを手紙に書いて送る者は兄弟の心に紙屑を投げる者である。かれは兄弟の心を言葉で殺し文字で殺す者である。兄弟の心を生かすよりも尚大なる殺しがある。汝の両親の思ひやりを殺す者である。本當に汝が心の殺人を止めて感謝の心に充たされるやうになるまでは、心の波長が違ふから神の救の靈波は受けられぬ。

（昭和六年九月五日）



# ◎無病常樂の神示

十一月号

2

病でゐると云ふ病は本來ない。苦しんでゐると云ふ苦しみは本來ない。  
「これだけ自分は苦しんでゐる」とその苦しみを自慢にするやうな心は、  
却つて病氣を招く心である。キリストの受難に倣つて自分も亦苦しもう  
などと云ふ心も愚かな心である。キリストは神性であるがら未だ嘗て一  
度も受難はない。十字架も受難ではなく受苦ではなく法樂である。神の  
子には「難」の受けやうがなく「苦」の受けやうがなく仕運無作、法爾  
自然、水の流るゝが如く、すべてが惟神の法樂である。斯くの如く悟る  
とき苦しみを自慢にする心も苦しみを厭ふ心もおのづから消え去つてし  
まひ、苦もなく、艱難もなく、苦樂を超越した本當の樂想を生じ、吾れ  
が一変し、天地が一変し、人生たゞ歡びの讃歌に滿されるのである。實  
相は苦樂を超越する法樂であつて、實相をもつて苦もなく樂もないと云  
ふのは謬見である。汝らが「樂」と稱する「樂」は本當の「樂」ではな  
いから、「樂」を求むれば必ず苦を生ずるのである。五官のうちには、感  
覺の惑はしのうちに「樂」があるとするのは謬見である。五官の「樂」し  
みは其の本性決して「樂」に非ざるが故に「苦」に變ずるのである。  
實相はかくの如き假相の苦樂を超越すれども、眞相の「樂」そのもので  
ある。法悅そのものであり法樂そのものである。その「樂」そのものが  
「常住の我」であつて、これが「神の子」である。「神の子」が



『明るい心を持つ』

(1)

心を支配すること。何をおいても心を支配すること。明るい氣持ちになるやう心掛けること。たゞそれだけを常にあなたに心掛けるだけでも、あなた運命は輝かしいものに轉じて来るであらう。あなたの健康は従来よりも増加して来るであらう。神は光明遍照であると云ふことを知らないければならない。光明のないところ、明るさのない所には神が在まさないのである。心に光明を満たす時、萬物が生々生々と蘇生つて来るのである。神は一切所に充ちてゐるのであるが、心の天岩戸の開かないところにはそのみ光は射し込まないのである。古事記に書かれてゐるのは虚ではない。天之宇受女の命の明るい舞踊に觸発された八百萬神々の明るい笑ひが暗黒の世界に、日の光を射し込ましたのである。吾々は明るいと共に積極的でなければならぬ。また愛がなければならぬ。積極的な者は一時は失敗するかも知れないが、その失敗は必ずや経験の上に何物かを獲得せしめるので結局は失敗ではないのである。明るいばかりで此の世を笑ひて吹き飛ばすだけでも完全だとは云へない。明るい上に積極性があり、更に建設的であり、しみりした愛があることも要するのである。神の造りたまひし世界に悪は存在しないことを信じてゐることである。常に神は吾々に対して「汝の罪赦されたり、立ちて歩め」と仰せられてゐるのである。全き信仰は神の愛を信じてゐることである。神の完全を信じてゐることである。此の言葉を信ずるものは幸ひである。(信の力)



目次

◎ 卷頭言

◎ 明る心を持て

◎ 無病常樂の神示  
一生死の教

◎ 光明の音信

◎ 實相體驗集

一 高壓恐るゝに足らず  
本を讀んで病氣の治つた話

◎ 消息欄及び後記  
一 住所録

◎ 英譯生命の實相

卷頭言

眞理が一つの經典にのみ書かれてゐると思ふのは偏つた考へである。救ひは或る特定の宗教でないと思ふのも偏つた考へである。若し或る一定の宗教でないと思ふと云ふのであれば、その宗教に屬しない何億と云ふ人間を救ふ神が必ず出て来るだらう。哲人は一本の草花にも眞理を見出し、言者は星の瞬きにも眞理の默示を聴く。かく眞理は草花や星の瞬きにすら宿つてゐるのに或る一つの聖典以外の經典には眞理がないと云ふ筈はない。「生長の家」はあらゆる宗教の眞理に救ひの原理を見出し、諸宗を却つて生々と生かすのである。(菊判生命の實相)



# 光の音の億



平九百四十四年一月創刊

亜町生長の家誌友會發行

第一輯 十一月號